

真価が試される2011年を迎えて

日本甲虫学会会長 新里 達也

日本甲虫学会は、日本鞘翅学会と（旧）日本甲虫学会が2010年1月に合併し、1年間の移行期間を経た後、本年2011年1月よりすべての会務と事業を完全に一本化するに至りました。「日本の甲虫学の進歩と発展」を共通の将来目標に掲げ、ここまでともに歩んでこられた会員の皆様の暖かいご理解とご支援に対して、まずは厚くお礼申し上げます。

昨年1年の移行期間では、会長と評議員選挙を実施し、会務を執行する役員を公選により選出しました。この手続きは、すべての会員に公平で質の高いサービスが行きわたるため、また民主的な会運営を執行するために実施したもので、旧両学会では過去に行われていません。また両学会の会計を決算し一旦清算したうえで、新しい学会に財産を引き継ぐ手続きを終了しました。さらに両学会はそれぞれ伝統ある欧文誌・和文誌を発行してまいりましたが、断腸の思いでこれらすべてを終刊とし、新しい欧文誌・和文誌を創刊することにしました。すなわち2010年の年初は看板を掛け替えただけに過ぎませんでした。年半ばには屋台骨となる新体制が編成され、年末には財布（会計）と事業（雑誌と行事）が一つになったわけです。とにかく目まぐるしい1年でした。この移行期間は山積する合併関連の事務処理を、前半は旧両学会の役員、後半は選挙結果を受けて新しい評議員と運営幹事が精力的に取り組んでまいりました。そうして2011年を無事に迎えることができたわけです。ここに至ってもう後戻りはできなくなりましたし、ようやく将来のことが考えられる起点に立てたということになります。

新しい学会では何が変わるのか、メリットやデメリットはあるのかという点がやはり気に掛かるところです。基本的には「財布と雑誌が一つ」になった以外にあまり大きな変化はないはずですし、もちろん混乱するような変化は避けなければなりません。その新しい学会の活動と展望について、ここで概要をお話しておきたいと思えます。

学会の顔であり主要な事業である機関誌は、欧文誌「Elytra, new series」が年2回、和文誌「さやばね ニューシリーズ」が年4回発行されます。名称は旧学会にあった誌名を拝借していますが、いずれも新雑誌であって1号からのスタートとなります。雑誌の誌面や表紙もデザインを刷新しました。また両機関誌とも質の高い誌面を確保するために、査読制度を導入することにしました。ただし和文誌の方では原著論文を掲載する一方、分類群の解説、研究方法の紹介、採集紀行、短報などの原稿も掲載して、幅広い会員層に愛される誌面作りを目指しています。また、不定期刊行物である特別報告や地方甲虫誌なども従来通りに企画があれば、出版・販売のお知らせを随時してまいります。原稿を投稿される著者にとって気掛かりな別刷や超過頁などの費用もより低額で利用できるように、編集作業の合理化や印刷会社との交渉のうえ、できるかぎりの配慮をしていくつもりです。なお、希望者には別刷のPDFファイル（電子版別刷）を無償で頒布することも始めます。紙媒体の別刷が不要の著者には別刷代の負担がなくなります。

学会行事である年次大会、地方例会および採集例会は合併により大きな効果が期待できます。年次大会と採集例会は従来通り年1回と同じですが、地方例会は東京（3回）、名古屋（2回）および大阪（3回）と合計すると年間8回の開催となります。もちろん会員はいずれの例会にも出席することができます。ただし1月と採集のベストシーズンに当たる4～7月の土日には例会は開催されません。

ホームページについては、開かれた学会を目指すという方針に沿って、会務の透明化を図り、会員に向けた多様な情報を発信し続ける媒体として、その機能の充実を図ります。学会行事に関する連絡はもちろんのこと、総会や評議員会や各委員会の報告なども随時掲載していくことになっています。実は昨年の新体制発足後に、直ちに会長任命をされた2名の副会長のうち、野村周平副会長にはこのホームページ担当の特命を受けていただきました。またもう一人、大林延夫副会長には和文誌の特命を背負っていただいております。新学会発足に当たり、和文誌とホームページの充実とくに力を入れていこうということでもあります。

会員サービスの充実ということではさらに、旧両学会から引き継がれたバックナンバーと交換図書の大きな財産が、大阪市立自然史博物館の収蔵庫に合わせて保管され、これで図書の在庫が一括で管理できるようになります。また在庫数が少なくなった年代の古いバックナンバーから順を追ってPDFファイル化を行い、その電子媒体を会員に提供するという計画も進行中です。